

重荷を負う為の問題所在

奨励	佐藤 博【さとう・ひろし】
奨励者紹介	日本キリスト教団京都丸太町教会牧師

わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。

(ヨハネによる福音書 15章1―11節)

新島襄の日本人への
問題提起

新島襄の同志社設立に掛ける思いが「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来たらん事を」のなかに強く込められています。この言葉からも「良心教育」が、同志社の建学精神の基礎となっていることが分かります。新しい時代を迎えたこの明治の世に、道徳的・武士道的良心を越えた、人と世に仕える「良心」を、新島襄自身はどう理解したのでしょうか。彼の著作を読んで深く理解していませんので断定できませんが、少なくとも広辞苑の「何が善であり悪であるかを知らせ、善を命じ悪をしりぞける個人の道徳意識」を遙かに越えたレベルのものでしょう。彼はボストンの恩人で熱心なキリスト教徒・ハーディーさんの生きていた「良心」を目標としていたでしょう。

単に社会人・紳士の条件としての、外面的に整った人や社会に迷惑をかけないといった「良心」ではありません。人間が常にとどまる「ほどほど」の「常識的」な「良心」でもありません。パスカル（1623～1662年）の、通称「瞑想録」として知られている『パンセ』の72項に「中間者」という言葉が出てきます。彼の人間の弱さを表す言葉です。人間は誰でも、「音」や「光」の一番高いものと強いものを感知できません。また、最も低いもの弱いものも認識できません。その他の人間の生き方にかかわる物質的精神的事柄のほとんどにおいて、「中間」の部分しか受け取れない「中間者」だとの人間理解を展開しています。すなわち「極度（一人間にとって一番大切な事柄）の事物は我々にとって無いに等しい」（津田権訳『パンセ』新潮社 1952年 53頁）と語っています。これが「音」や「光」の物や物理的現象であれば特に大きな問題ではないのですが、殊に人間の幸せや生き方にかかわってきますと重要な問題が浮上します。

新島襄が「良心の全身に充滿したる」と言う場合、「良心」が頭や気分というところだけでなく、心やもっと深い魂の奥に届き充滿して初めて、自らと人と世に良き人格的感化を及ぼすに至ります。文科省は人心の荒唐回復のため、道徳教育に力を入れようとしています。机を並べて教科書によって、人が正しく生きることを教えることは良い成果を期待できません。それを熟知していた彼でしたので、あえて、聖書を土台としたキリストの福音を教え伝えて「良心の全身に充滿したる」者の育成を同志社で実現しようとしたのです。

まず「良心」の下拵（ごしら）え

先ほどの「中間者」が途方もなく高い音や強い光に耳を塞いだり目を閉じたりせず、恐れずに向き合うこと、すなわちイエス様のお言葉に従って自分の弱さ、愚かさ、罪を知らされる所から「良心」・「謙遜」の形成が始まります。パスカルは『パンセ』の397項で「自己をみじめるものと知ることにおいて偉大である」（前書、241頁）と語っています。彼が受け取った「自分の惨さ」の告白です。この境地に彼を導いたのは、彼の健康・自分の肉体の弱さを知ったという現実です。第二はキリストのお言葉に従いきれない、自らの罪の深さを知らされたことです。パスカルの「中間者」に戻りますと、イエス様よりの「中間的」なお言葉、損をしないで私に都合のよい、従いやすいお言葉では、人は自らの本当の罪を知らされるに至りません。それではイエス様の前で、自らの正しさを誇り碎かれた謙遜な者へと変えられません。逆に従えない生活や、命の破綻に至る言葉に従おうとして、従いされないで罪を知らされ、謙遜に導かれた時、「良心」の形成への豊かな下拵えが整い、その器に人やこの世のものを越えた天よりの良きものの充滿が始まります。

「良心」の器に
何が盛られるか

今回の聖書の箇所ヨハネによる福音書の「イエスはまことのぶどうの木」から学ぶことにしました。私たちがイエス様を神の子、救い主として信じることによって、その人の人生に「豊かな実が結ぶ」との約束です。この「信じる」とはイエス様に「つながる」「とどまる」という言葉で、この箇所に多く登場します。それは表面的・理性的・観念的な「つながり」でなく、イエス様に果物の木の接木のように人格的に「つながる」ことが求められています。しかし、イエス様が人の子として来てくださった時代はイエス様と直接「つながる」ことが可能でした。イエス様の昇天後、現代では直接的に「つながる」ことはできません。今日において「つながる」具体的手段は、「わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば」（7節）の「あるならば」は「つながる」と同じですので、「つながる」ことが現実のものとなります。このことを、パウロというイエス様の特別に選ばれた弟子は「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」（ローマの信徒への手紙10章17節）と、非常に明解に信仰の仕組みが、「お言葉」との「つながり」であることを教えています。

しかし、厄介なことに、人間は常に自分や人の世の都合を重んじて、神の驚くべき恵み・救いを与えてくださる「お言葉」を敬遠します。マリアが天使から「あなたは身ごもって男の子を産む」と告げられた時は、人間の間では全く受け入れられない「中間的」な言葉でない、お言葉に途方に暮れたことでしょう。しかし、マリアは見事に「お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカによる福音書1章31・38節）と、「お言葉」に聞き従い、キリストの母となる栄光の任務を果たしました。

私たち普通の人間にも、天より与えられた「お言葉」を信じて、受け取る果実すなわち宝物も、マリアに匹敵する驚き・恵みが与えられます。私のような、まことに足りない小さな者の実体験ですが、愛媛の石鎚山の麓の教会に1982年新しい教会が与えられました。貧しい人が殆どどの教会でした。それまでの不十分な信仰ながら、お言葉に聞き従って歩んだ末の、最後に与えられた仕事でした。二十数人の会員で560㎡（170坪）の礼拝堂・牧師館・ホール・子ども図書館他の建物でした。この時、私と教会に与えられた「お言葉」は「天の神がわれわれを恵まれるので、そのしもべであるわれわれは奮い立って築くのである」（ネヘミヤ記2章20節、口語訳聖書）でした。このときは銀行より貸していただいたお金も含まれていましたが、この「お言葉」どおり、イエス様を信じて、この町に必要な建物がイエス様の憐れみによって見事に与えられました。人間の小ささ・貧しさを越えて、イエス様の真実とその恵みの大きさに圧倒された出来事でした。神様とイエス様の「お言葉」の不思議は昔も今もこれからも、「お言葉」どおり、それは「出来事」となるという仕組みが「お言葉」のなかに内蔵されています。

ここで、聖書の「お言葉」の不思議な言語的・信仰的側面を紹介します。これまで私が「お言葉」として新約聖書から引用しましたものはすべて、ギリシア語の「ロゴス」ではなく、ギリシア語のなかのヘブル語の「お言葉」の「ダーバル」の訳に最も近い、「レーマ」という言葉です。これを直訳しますと「口から発せられた声」との意味です。すなわち神様やイエス様のお口から出る息、つまり聖霊を伴ったお声（お言葉）は、必ず人間の歴史・営みのなかで、その「お言葉」どおりの出来事となります。先のマリアのイエス様誕生の後、天使が羊飼いに「救い主がお生まれになった」「飼い葉桶の中に寝ている」（ルカによる福音書2章11・12節）と告げます。それに応えて羊飼いが、「その出来事を見ようではないか」（同、15節）と語ったと綴られています。この「出来事」は先の「お言葉」・レーマを、この所では「出来事」と訳しています。この世に生きている人間は、キリスト信者も含めて、この「お言葉」のイエス様にある真実・実力をあまりにも過小評価しています。ここに教会とキリスト信者の不幸があります。なんとか「中間者」からの脱却を図りたいものです。

結び

ヨハネによる福音書15章11節は、「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」と結んでいます。下拵えで整えられた正しさと、誇りの碎かれた謙遜な「良心」の器に、イエス様の「お言葉」を信じて生きるものに与えられる、「お言葉」が実現した恵み・救いが与えられますと、その「良心」に喜びが充滿します。このときは初めて、損失や危険を越えて自らを生かすと共に、人と世に仕えていく「良心の全身に充滿したる丈夫」という器へと変えられます。

新島襄のこの言葉、パスカルの言葉は、現代に生きる人間、同志社人への挑戦の言葉です。いつまでも聞き流し続けて良いのでしょうか。